

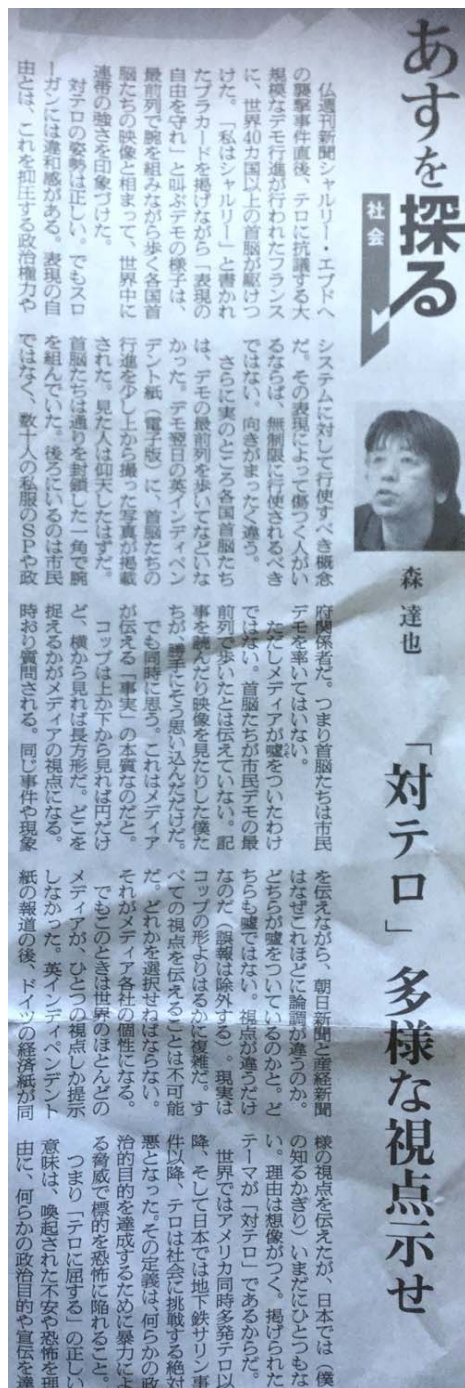
「対テロ」多様な視点示せ

表題と写真は朝日新聞 1 月 29 日「あすを探る 社会」である。映画監督・作家の森達也さんが「対テロ」について鋭い発言をしている。昨日レポートでも書いたが、後藤健二さん「殺害」のニュースは衝撃的であった。安倍政権の対応とともに、メディアがどう報じるかにも興味があり、森さんの発言を思い出して再読した。

「私はシャルリー」と書かれたプラカードを掲げながら「表現の自由を守れ」と叫ぶデモの様子は、最前列で腕を組みながら歩く各国首脳たちの映像と相まって、世界中に連帯の強さを印象づけた。対テロの姿勢は正しい。でもスローガンには違和感がある。表現の自由とは、これを抑圧する政治権力やシステムに対して行使すべき概念だ。その表現によって傷つく人がいるならば、無制限に行使されるべきではない。向きがまったく違う。

さらに実のところ各国首脳たちは、デモの最前列を歩いてなどいなかった。デモ翌日の英インディペンデント紙（電子版）に、首脳たちの行進を少し上から撮った写真が掲載された。見た人は仰天したはずだ。首脳たちは通りを封鎖した一角で腕を組んでいた。後ろにいるのは市民ではなく、数十人の私服の SP や政府関係者だ。つまり首脳たちは市民デモを率いてはいない。

ただしメディアが嘘をついたわけではない。首脳たちが市民デモの最前列で歩いたとは伝えていない。記事を読んだり映像を見たりした僕たちが、勝手にそう思い込んだだけだ。でも同時に思う。これはメディアが伝える「事実」の本質なのだ。コップは上か下から見れば円だけど、横から見れば長方形だ。どこを捉えるかがメディアの視点になる。世界中が対テロで一体化しつつある現在だからこそ、メディアは多様な視点を提供しなければならない。こうした森さんの発言は、後藤さんの衝撃的なニュースが伝えられ、「一体化ムード」が強まる中で大切な視点だと思う。



(2015 年 2 月 3 日)